

位置づけられ、個別の事例の代表性の問題は前面に出にくい構成になっている。

ただし、この方法がすべての問題を解消するわけではない。とりわけ抑留経験を国・地域ごとに捉えようとする視点との間にはなお検討の余地が残されている。同書では章題においてなるべく国別区分を前提としない工夫が見受けられるが、実際の抑留のあり方は連合軍側の統治主体によって規定されていたことから、記述においては旧植民地や今日の国・地域ごとに整理されざるを得ない側面がある。こうした整理のしかたは、ジャワでは再動員、レンバン島では飢餓、ビルマでは文化活動、フィリピンでは暴力、ラバウルでは軍隊秩序の持続といったように、それぞれの地域の経験を特定の特徴と結びつけて理解する契機にもなりうるだろう。その結果、地域ごとに異なる経験の間に存在する重なりや多層的な広がり相対的に見えにくくなる可能性も否定できない。

もっとも、こうした点は同書の価値を損なうものではなく、むしろ同書が提示した枠組みが新たな問いを呼び起こしていると見るべきだろう。南方における多様な戦後経験をどのように記述し、どのように共有しうるのであるかという困難な課題を正面から引き受け、その輪郭を示したところに同書の開拓的な意義がある。

『残留兵士』と『南方抑留』は、それぞれ異なる方法で戦後経験の記述の可能性を押し広げている。両書は東南アジアにおける戦後経験の多様性を明らかにするだけでなく、それが日本との関係の中でどのように語られてきたのか、あるいは語られてこなかったのかという問題も浮かび上がらせる。そこに見えてくる記憶の非対称性は東南アジア研究に対しても新たな視座をもたらすだろう。両書はその接点を切り開く試みとして今後の研究に少なからぬ示唆を与えている。

(山本博之・京都大学東南アジア地域研究研究所)

参考文献

林 英一. 2012. 『残留日本兵——アジアに生きた一万人の戦後』中公新書. 東京：中央公論新社.

パッタジット・タンシンマンコン. 『タイ外交史を読み直す——「竹の外交論」からの脱却』東京大学出版会, 2025, xi+279p.

本書は、タイ人である著者が日本語でタイ外交史の再解釈を試みた貴重な一冊である。本書の目的は、竹の外交論によるタイ外交理解をライバル仮説として、指導者らの対外認識の詳細な考察によって、タイの外交をより「主体的な」歴史として「読み直す」ことである。主として、1960年代から現在までの複雑な国際情勢と国内政治の中で、タイの指導者、メディア、知識人、一般市民がどのように対外意識を形成し対外政策に関与してきたのかという重層的な関係性に焦点を当てる。この著者の対外認識に注目するアプローチは、竹の外交論をネオリアリズム的な大国間の権力構造による外交の説明として捉えたうえで、それへの対抗としてのアクターの認識やイメージや規範に注目する構成主義的国際関係論の特徴を持つ。

以下、最初に、本書の内容の概略を紹介し、つぎに、若干の評者の考察を述べたい。まず、「まえがき」において、本書のキーワードである竹の外交論を、「歴代の聡明な指導者らが主体性を置き去りにして大国の風向きに巧みにしなった結果、タイは独立が保たれた」という論理で構成され、この概念の前提には「小国意識」があると説明する(p. ii)。

序章において、著者は、本書の目的は竹の外交論の見直しであると述べる。著者は、竹の外交論の問題点として、その定義の曖昧さ、逸脱事例の無視、各アクターの主体性の見過ごしの3つを挙げ、それらの問題の克服を目指す。本書の狙いは、竹の外交論がいう、大風が来ると機械的にその風に賢くしなう竹が語る物語ではなく、アクターの認識に注目することによって、多様な人間性が垣間見える「もうひとつ」の外交史を描くことであると説明する(p. 11)。アクターの認識に注目する理由は、政策決定者は状況の「客観的」事実に対応するのではなく、世界の「見え方」にしたがって行動するからであると指摘する。したがって、アクターの主体性を軽視する「竹の外交論の神話」から脱するためには、アクターの認識に注目する

ことによってアクターの主体性を回復せざるを得ないと主張する (p. 12)。

1章以下では、竹の外交論への反論として、竹の外交論が看過した諸事例を再考する。

「第1章 竹の外交論再考」では、中国、英仏、日本、米国といったタイ（シャム）が歴史的に対峙してきた大国に対して、竹の外交論が説明する「タイの指導者は常に主体性を捨てて風にしなうことで独立を保つことができる」(p. 22)という「通説」への批判を展開する。著者は、5世王、ビブーン、サリットといったタイの指導者はいずれも、大国に対して主体性を持って行動し、時には状況の錯誤や外交の失敗もあったことを強調する。さらに、指導者たちは、小国意識を共通して持っていたと主張する。著者によれば、小国意識とは、「弱者の立場からの国際環境や対外関係、政治、経済、行政、軍勢力における『限界』を受け入れ、その中で行動するという『小ささ』の自覚に立脚した自己意識である」(p. 60)。

「第2章 『悪魔』の創造、妥協、接近」では、1963年から73年までのタノーム政権の親米反中から中国接近外交への変遷を考察することによって、竹の外交論への反論を展開する。すなわち、竹の外交論は、指導者の先見性を強調し、「ベトナム戦争での米国の敗北と中国の国際的な地位の向上を受けて、タイが中国の風にしまった」(p. 97)と主張してきたが、対中姿勢の緩和は、先見性のある指導者が世界情勢の激変にうまく追随した結果というよりも、世界情勢と世論の圧力を受けて調整せざるを得ない政策判断の結果であったと著者は指摘する。1968年から顕著になる米国の反戦運動やベトナム化政策以降、タナット外相や知識人は親中反米へと転換するが、タノーム首相ら対中慎重静観派はクーデターによって対中和解路線を否定し、世界情勢と国内政治の変化に抵抗した。さらに、タイの対中慎重静観派にも中国接近派にも「小国意識」が共有され、どちらも、タイは小国であるから、敵に対峙するために味方の大国に依存すべきだという認識を共有していたことを著者は指摘する。

「第3章 揺れ動く『悪魔』の意味」では、1970年代の反日運動、反米運動、中国との国交樹立が

タイの各アクターの対外意識に基づく主体的な行為であったことを主張する。すなわち、著者によれば、竹の外交論は、タイが中国と国交を樹立するに至った経緯を、「隣接するインドシナがドミノ倒しのように共産化されることを恐れる中で、東南アジアにおける米軍基地が後退し、中国の国際的地位が高くなったため、中国の風にしまった」(p. 104)と説明しているが、反日運動、反米運動、中国との国交正常化は、左右両派が小国意識をもって独立と主権の確保という目標を共有しながら、異なる敵に対する対外認識の綱引きをした結果であると主張する。

「第4章 『ジェノサイドの愛国政権』」では、クリエンサック、ブレーン、チャートチャーイの各政権がそれぞれ国際環境の変化に対して主体的に、ベトナムへの敵対的認識を徐々に強めたが、最後には宥和政策に至った過程を説明している。著者によれば、竹の外交論は、「1978年に勃発したベトナムによるカンボジア侵攻は、タイを中国の風にしなわせ、対中関係を緊密化させた」(p. 177)と主張した。しかし、この主張は、3つの政権のカンボジア紛争に対する認識と対応の違いを看過し、各政権の主体性を見落とした評価であるという。著者によれば、この時期、タイは小国意識を持ち、国益を優先したために、中国に接近しボルボトを支援するという人道主義に反する政策をとった。さらに、チャートチャーイ政権では一時的に小国意識を脱して地域のリーダーになるという自己意識をもったと、著者は主張する (p. 178)。

「第5章 『愛国』と『売国』の狭間で」では、1990年代が冷戦時代と現在とを連絡する架け橋であるという認識のもと、1990年代から現在までの政府、財界、メディア、学者といった多様なアクターの対外意識の変遷を取り扱う。著者によれば、多くの先行研究は、2014年以降にタイが中国に傾斜した現象を、台頭する大国追随、いわゆる「風にしなう竹」の外交の再現であると指摘したが、中国傾斜は2014年のクーデター後に突如として発生した現象ではなく、1997年の金融危機と2001年のタクシンの登場といった、1990年代からの一連の国際情勢、国内政治をめぐる議論の変化によって蓄積された産物である。これらの蓄積が反米親

中感情を基盤とするナショナリズムを形成し、そのナショナリズムが中国傾斜を正当化していったと主張する。

「終章 竹の外交論を脱して」では、本書の結論として、タイ外交の主体性を軽視した竹の外交論によるタイ外交の分析が妥当ではないこと、タイ外交に通底する「小国意識」が近隣諸国へのタイの帝国主義的外交を隠していることなどを主張している。

本書の学術的意義は、第1に、本書が国内の諸アクターの対外認識と外交政策との関係をタイ日英中の四カ国語の史料に基づいて詳細に考察している点である。本書は、タイの外交政策を国際関係や他国との外交交渉史として説明するのではなく、諸アクターの外交認識に注目することによって、外交アクターの主体性を回復することを目的としており、その目的は十分に達成されているであろう。本書は、とりわけ1970年代以降のタイ国内の対外意識に関する指導者や知識人の言説を一次資料に基づいて丁寧に分析している。その詳細な分析により、タノーム首相が親米政策を維持することを目的にクーデターを引き起こしたことや、反中派であったククリット首相がタイ国内の学生や知識人の要求に抗しきれずに親中政策に転じたことを、対外意識を回路として国内政治と外交政策のダイナミックな関係によって分析している点は高く評価される。

第2に、本書が、時代を通じてタイの指導者をもつ小国意識を明らかにし、その小国意識がタイの隣国に対する帝国主義的政策を覆い隠すイデオロギーになっていることを指摘している点である。この議論は本書では必ずしも体系的に展開されているとはいえないが、中小国の外交研究や国際関係研究に対して重要な理論的示唆を提示している。たとえば、小国意識の概念はタイの対大国関係と対小国関係の連動性への視点を可能にしており、カンボジアやラオスなどの近隣諸国へ支配性（指導性）を発揮するために、大国との関係強化を求めるというタイ外交の特徴を分析する枠組みとして構築される。

つぎに、竹の外交論への批判という本書の論理構成（議論の組立て方）について若干の考察をし

たい。著者によれば、各アクターの声（認識）に注目することによって、アクターの「主体性を回復する」ことが本書の目的である（p. 229）。その目的の重要性を説明する手続きとして、竹の外交論を、タイは大国の力学の「風」に対して、「竹」のようにそれにしなうだけだという、アクターの役割を軽視した構造主義的議論として定義して、その竹の外交論をライバル仮説として設定する。したがって、著者の定義する竹の外交論における「主体性のなさ」は本書において本質的な意味をもつ。

しかし、著者自身が認めるように、竹の外交論は曖昧な概念である。著者は、たとえば、竹の外交論を「明敏性」「先見性」「柔軟性」、そして「主体性のなさ」によって説明する（pp. ii, 10, 227）。この前者の3つの概念は指導者などの外交アクターの主体性についての説明であり、最後の「主体性のなさ」とは相容れない。このような定義の多義性から、著者のいう「主体性」とは何か、そして、竹の外交論はそもそも「主体性」を無視しているのかという疑問が出てくる。むしろ、竹に象徴される意味は、竹は強風が吹いても「折れずにしなう」のであるから、一方的に大国の圧力に屈するという意味ではなく、小国なりの何らかの主体性もしくは「自立性」を意味する概念として用いられることが多いのではないかと[Kislenko 2002]。

では、なぜ著者は竹の外交論に主体性のなさを求める必要があったのか。それは、外交アクターの意識に注目する著者自身のアプローチの重要性を主張するために、そのライバル仮説として主体性への視点のなさを「竹の外交論の歴史観」に求めたからではないか。すなわち、本書は、アクターに注目してタイ外交史を読み直すという「独自性」を主張するため、アクターへの視点がない竹の外交論の歴史観が誤りであることを立証するという議論構成を持ったからではないか。

すでに述べたように、タイ外交には外交諸アクターの主体性があったという各時代の本書の詳細なタイ外交分析の学術的意義は非常に高い。しかし、その各時代の外交分析が、本書の目的とする「タイ外交史を読み直す」ことを意味するとは必ずしもいえないのではないかと。なぜなら、先行研究

の竹の外交論は本当に主体性のない見方（歴史観）に基づくのかという疑問があるからである。

言い換えれば、竹の外交論の歴史観の批判的考察が本書の主題であれば、議論の進め方としては、まず、各時代のタイ外交についての「竹の外交論の歴史観」による分析には外交アクターへの注目が少ないことを先行研究によって示し、つぎに、主体性を回復した著者の歴史観によって、各時代の外交アクターが重要な役割を果たしたことを立証すれば、竹の外交論の歴史観批判は説得性を増すのではないか。しかし、各章において、著者のいう竹の外交論に基づく各時代の詳細な先行研究の考察はなく「通説」の記述で終わっているために、いかなる先行研究が著者のいう各時代における主体性のない竹の外交論を展開しているのかが、必ずしも明確ではない。その結果、竹の外交論には主体性がないという主張の妥当性に確証を持ってないため、竹の外交論からの脱却という本書の主張の説得性は必ずしも十分とはいえないのではない。その理由は、アクター分析の重要性を竹の外交論への批判という手続きによって主張する議論の構成にあるのかもしれない。

本書はこのような方法的課題はあるにせよ、タイ国内の諸アクターの対外意識に注目した国内政治と対外政策の関係についての詳細な分析や小国意識についての議論の学術的意義は高く、タイの外交や政治、東南アジア、国際関係を学ぶ者にとつては必読の書である。

（高橋正樹・武蔵野大学名誉教授）

参考文献

Kislenko, Arne. 2002. Bending with the Wind: The Continuity and Flexibility of Thai Foreign Policy. *International Journal* 57(4): 537-561.

井上 航.『音を帯びる——カンボジア北東部クルンの「参与」の民族誌』春風社, 2025, 277+vp.

音を「帯びる」。

これが、カンボジア北東部クルンの村でのフィー

ルドワークを踏まえた、音の民族誌である本書の趣旨が要約された一語である。

本書は、これまで、断片的な記述のみであった東南アジアにおける山地少数民族の音楽研究に新たな知見を加えるとともに、音を前面に立てる研究に対しても新たな地平を切り開こうとするものである。近年、「環境の知覚がどのようにして人間の音響的表現と結びついているか」[山田 1991]という視座が示され、音というものに耳を澄ますことで時間・空間・場所・環境を身近なものにし、生活世界の一片を理解しようとする民族音楽学のあり方が展望されてきた。そのなかで、本書は更に、先行研究にみられなかった束の間の一回性の経験を記述の前面に押し出す姿勢を重視している。これは、グローバル化などで「文化」の境界が曖昧になり、総体としての「文化」より、個の身体への注目、一回きりの経験を重視する近年の民族誌的学問の傾向ともかかわる。本書は、鳴り響いている束の間の一回的な経験という音の本質を重視する。そして、音とともにどのような楽しさや気分が束の間味わわれているかに注目し、そうした「もろもろの束の間の感じ味わいの質を帯びる」(p. 27) ことが「音を帯びる」ことだという。

著者は、村人の「日常の活動との連続性において、音の響きのなかで時を過ごすというのはどのようなあり方なのか」(p. 18) という点に注目する。そして、フィールドワークでは、人々と生活とともにし、人々の中に流れる時間やリズムを共有することに重点を置いた。「参与観察」の「参与」は、参加の行為を問題とする「参加」ではなく、「出来事に参加しようと近づいていったらおのずとある感じにとらえられてしまった」(p. 249) ことであり、著者はとらえる。ここに、「帯びる」という概念の重要さがある。フィールドワークでは、身近な音に村人とともに接し、かれらが音を「帯びる」ことで経験する生のリズムや雰囲気や気分のなかに研究者自身が身体を浸すことをとおして、何を感じられ、何が理解できるかを問う作業が中心となった。

以上のような著者の研究のスタンスを示した序章に続き、第1章では対象地域とクルンの人々の概観、そして著者がどのように人々の生活に巻き